

師走の候 宮崎県防衛協会青年部会宮崎支部会員の皆様には、恙なくお越しの事と大慶に存じます。

また皆様には今年一年間、当支部運営に際し物心両面に亘るご支援を賜り、衷心より厚く御礼申し上げる次第です。

さて十一月の自衛隊関連行事は、十五日に宮崎地本にて高等工科大学校宮崎県生徒育成会の総会を実施して、今後の生徒育成会活動方針や生徒募集協力等の議題を協議した矢先、十七日のヤフーニュースで「十八道県の二十一地本が、五百以上の市町村に高等工科大学校生徒募集の為、中三の個人情報提供を依頼」の記事が流れました。

その翌日の宮日新聞には「二十一各地本の中に宮崎地本も入っていた」との記事も大きく掲載され、誠にお気の毒に「菊田地本部長が関係自治体への謝罪、及び再発防止に勤める」とのコメントも添えられていたようです。

我々の議題と余りにタイムリーな記事内容だった為に少々驚いたのですが、宮日記事の取り扱いの割には市井の話題にも上らず、かえって高等工科大学校の紹介記事になったような案配で、関係者一同胸を撫で下ろしました。

高等工科大学校の存在すら知らない人が多い宮崎で、この記事で興味や関心を持つていただけたら来年一月に実施される一次選抜受験者も増えて、正に怪我の功名となるかも知れません（笑）

ところで十月中頃「特定失踪者問題調査会」の荒木和博代表からのメールが転送されて来ましたので、皆様にも以下にご紹介致します。

■秘密警察

荒木和博

昨日は国会周辺で四つの会合がありました。十五時から自民党の拉致問題対策本部、十六時から次世代の党の拉致問題対策本部、十六時四十五分から拉致議連総会、十七時五十分から家族会・救う会・拉致議連合同の集会。

前の三つでは外務省から日朝交渉の状況について説明を聞きました。その中で分かったこと、というか自分が間抜けで気がついていなかったことが一つ分かりました。

宋日昊は「日本側が平壤を訪問して特別調査委員会のメンバーと面談すればより明確に聴取できる」と言ったそうです。そして北朝鮮の「特別調査委員会」とやらの担当者が出てこれない理由は秘密警察（保衛部）の人間だから外国には出られないとのこと、この理由も宋日昊が言ったものだと思っていました。

しかし、今日外務省から聞いて分かったのは、その理由は外務省が考えたことであり、宋日昊が言ったわけではないということでした。つまり、伊原局長の質問に答えるのが面倒くさくなった宋日昊が「それなら平壤に行って担当者に聞いてくれ」と言っただけ、ということですから「お前の方が拉致をしたのだから出てくるのが当たり前だろう」とはひと言も言っていない。それをごまかすために「秘密警察」云々の話を作ったということのようです。

そして三つの会議で配られた同じ資料にはひと言も書いていませんが、九月二十九日の瀋陽での会合では墓参の政府事業化のことも話し合われました（これについては伊原局長に質問したところ否定しなかったので間違いなんでしょう）。国民が見えないところで墓参事業から遺骨ビジネスという流れもできつつあります。

北朝鮮を騙さずに国民を騙す。拉致被害者を救出しようという覚悟もなく北朝鮮に配慮する。これが現在の日朝間の交渉です。昨日のそれぞれの会議では、結局外務省に任せても無理という結論だったと思いますが、ともかく別のやり方を進めなければならぬ、強くそれを感じました。

以上ですが、最近「ブルーリボンバッジ」を佩用する人も余り見かけず、北朝鮮による拉致事件の話も、巷間めつきり少なくなつたように思います。

テレビ等で度々拝見する横田夫妻のお顔も疲労が色濃く濃く感じられ、一日も早いめぐみちゃんの元気な帰国を、同胞として願わずにはおられません。

それなのにこの外務省の対応からは国民を守ると云う気迫が全く伝わらず、宋日昊からいい加減にあらわれているようです。

特定失踪者の全員帰還と云う命題から大きく逸脱し、墓参事業や遺骨ビジネスに変容しつつあるとの情報は他からも仄聞しておりましたが、荒木代表のような拉致問題の中心にいる方から聞かされると信憑性が一段と増してきます。

我々としても決して関心を失わず、断固として北朝鮮と対峙しつつ拉致被害者全員帰国の実現を果たす、と云う姿勢を政府に見せ続けねばなりません。

さてその政府は師走選挙で十二月十四日に国民の審判を受けますが、「平成の富国強兵」の為にも、何としてもここで勝利して貰わねばなりません。

支部会員の皆様にも何卒一層のお力添えを賜り、各々忘年会等に於いて共に勝利の美酒で祝杯を挙げたいと存じます。

平成二十六年十二月一日

宮崎県防衛協会青年部会 副会長 兼ねて 宮崎支部長 小倉和彦